

## ホームヘルプ事業の先覚者における思想展開とハウスキーパー構想

—戦間期から終戦直後までの原崎秀司の苦悩体験と理想像—

○ 帝京平成大学 中嶋 洋 (005048)

キーワード：原崎秀司，ハウスキーパー，ホームヘルプ事業

### 1. 研究目的

原崎秀司（1903.8～1967.5,以下,原崎）は50歳時に、国際連合社会福祉奨学生として欧米社会福祉視察研修に臨み、スイス、英国、仏国、米国などを幅広く見聞し、とりわけ英国視察時にみたホームヘルプ事業に深い感銘を受けたとされる。しかし、視察以前の彼の生活や思想はこれまで十分明かされてこなかった。従来原崎の思想研究では、戦前あるいは戦中について詳解した研究はなく、いずれも戦後のものであった（竹内 1974:59;池上 1991:10;上村 1997:249 など）。近年、中嶋（2011:28-39）によって、原崎が行った欧米社会福祉視察研修の行程や内実が解明されつつあるものの、視察研修過程などの海外の影響がクローズアップされるあまり、戦前の日本国内の影響の検討が不十分である。

また、池上（1991:10）は「原崎さんは戦後困窮した国民生活のなかで、近代社会福祉制度の基盤確立に努力された方」と述べるが、原崎が困窮をどう捉え、いかにして近代的制度の基盤構築を目ざしたのかが不鮮明なままである。こうした問題意識から、戦前から終戦直後（欧米社会福祉視察研修前）までの原崎の生活実態や思想形成を第一次資料に基づきながら明らかにする必要があると考えた。

そこで、本発表では、ホームヘルプ事業への着眼という戦後の原崎の功績をもたらした戦前の、とりわけ戦間期から終戦直後までの原崎の思想展開に注目し、その変容や日常生活への影響を明確にすることで、ホームヘルプ事業着想の底流となった彼の思考及び経験を具体的に明らかにすることを研究目的とする。

### 2. 研究の視点および方法

戦後日本のホームヘルプ事業創設の過程には、それを求めたニーズや社会の実情が当然影響していると思われるが、一方、そこには必ず原崎などのキーパーソンの思想や意志も少なからず介在していると考えられる。このような史実として表面化しにくい思想や意志を改めて捉え直すことは、この事業に託された意味や、そもそも何を志向したものであったのかということ明らかにする糸口になると考える。すなわち、原崎には視察以前に同事業への着眼につながる伏線があったとするのが本発表の視点である。

研究方法としては、今回新たに発掘した原崎直筆の日誌『遠保栄我記（新正堂版）』（1938年11月～1949年10月28日、以下、日誌）並びに戦後、彼が戦前を振り返りながら記した幾つかの論稿などの第一次資料に依拠しながら論考する。加えて、史実や史的展開を正

確に把握するために、年表（「原崎秀司の63年間の生涯」）を作成し、適宜参照した。

### 3. 倫理的配慮

倫理的配慮としては、2009（平成21）年8月3日、原崎の実子（長男）の原崎修一氏から、研究範囲内での日誌の使用許可を得ている。

### 4. 研究結果

戦後長野県に初めてホームヘルプ事業を導入し得た原崎の着眼や実践は、必ずしも偶然ではなく、幾つかの伏線があり、彼の苦悩体験や理想像の思考などを基盤とした思想観から派生していた。原崎直筆の日誌をていねいに紐解くと、そこには、先妻を亡くし、幼子3人を抱える父子家庭の父親としての生活の苦しみがあったことが分かる。加えて、『知性の改造』や『カントの日常生活』などから、生活規範や実践力の大切さを学んだ経験も大きかった。彼の思想形成では、転職や敗戦など当時の多くの人々が経験していた実体験が影響していたが、これらのみならず父子家庭の父親としての苦悩や子どもへの憐憫感があり、これこそが、原崎ならではの思考や着眼をもたらし得たと考えられる。敗戦から復興への苦難を地方行政官と父親という二役を担い試行錯誤するなかで、子どもの健全育成や円満家庭に必要なハウスキーパーの重要性を認識したことを第一次資料から明らかにした。

### 5. 考察

以上、本発表では、原崎直筆の日誌を紐解きながら、ホームヘルプ事業への着想を可能にした背景要因として、戦間期から終戦直後までの原崎の思想展開とハウスキーパー構想を考察した。性質や本質など物事を正しく捉える哲学的思考を基としていた原崎は、敗戦や妻の死などの劇的な生活変化に対しても、自重の努力を怠らず、強固な意志や理性を保ちながら節制的生活を志向していたことを明確にした。原崎は、自省を通し、努力、学習、創意工夫といった内的要因から、変革の道のりへの起点を日常生活のなかに置いていた。このこと自体、「ホームヘルプ事業」の草案づくりの一端につながっていたと考える。

公務という義務的側面もあったが、厚生事業から社会福祉事業への転換期において、転職や敗戦といった大勢の人々が経験した体験に加え、妻の死と一人親家庭の苦しさという、あまり他言し難い原崎ならではの苦悩体験があったからこそ、彼独自の視点と着眼をもたらし得たと考察する。すなわち、一人親家庭の大変さや子どもへの影響を懸念した原崎が苦慮した末に導き出されたのが、「ハウスキーパー」の必要性という考え方であり、ハウスキーパーがいない不遇な一人親家庭への懸念や配慮が結果的に、戦後の新たな社会福祉事業の一形態としてのホームヘルプ事業への着想の伏線になっていたと把握した。

本発表の内容は、事業や制度の創設過程に介在しているキーパーソン思想・意志への理解を深めることが埋もれた事実の追究につながることを実証した一例である。